慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : Makiko Kimura, The Nellie Massacre of 1983: Agency of Rioters(New Delhi: Sage, 2013)
Sub Title	
Author	石坂, 晋哉(Ishizaka, Shinya)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2014
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.19 (2014. 7) ,p.105- 108
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル : 「書評 : Makiko Kimura The Nellie Massacure of 1983」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20140705-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：Makiko Kimura

The Nellie Massacre of 1983: Agency of Rioters (New Delhi: Sage, 2013)

石坂　晋哉

本書は、インド現代史の汚点のひとつ、「ネリーの虐殺」に関する初めての本格的な学術研究である。「ネリーの虐殺」とは、1983 年 2 月 18 日、インド北東部アッサム州ネリー近辺で約 1600～2000 人にものぼるベンガル東部（現バングラデシュ地域。ただし 1947 年まで英領インドのベンガル州東部、1971 年まで東パキスタン）出身のムスリム農民とその子孫たちが、先住民族ティワの人びとらに殺された事件である。著者の木村真希子氏は、2001～2002 年と 2007 年にこの事件に関する現地フィールドワークを行った。

本書は全 7 章から成っている。以下、まずは本書の内容を概観したい。

第 1 章（序論）では、本書の目的が明示される。本書の目的は、なぜ一般の人びとが暴動に参加したのかを、そして人びとが事件後いかにして暴力の記憶とともに生きているのかを明らかにすることである（4 頁）。第 2 章（「暴動」をいかに捉えるか—現代南アジアにおける集合的暴力論とエージェンシーの問い）では、先行研究の問題点と課題が示される。まず著者は、南アジアの集合的暴力に関する初期の研究の到達点を整理している（24 頁）。そのうち、「野蛮な他者」ではなく一般の人びとが状況次第でいつでも暴力の加害者になりえることの強調や、問題解決に向けた実践的取り組みの一環として学問的研究を行おうとする志向性、集合的暴力の語りや記憶を捉える方法論の追求といった点は、本書著者の基本的姿勢とも重なっているといえよう。続いて、P. ブラスらの研究のように、暴動が、政党等の組織によって政治的につくられる側面を分析することの重要性が強調され（27-29 頁）、他方、暴動への一般の農民たちの参加は、B. ロイの研究のように、人びとが自身の置かれた状況をいかに認識し、そのうえでいかにして暴動への参加を決断したか、という角度から明らかにされるべきだとしている（32 頁）。さらに、人びとの記憶は、常に現時点の状況下で集合的に構築・再構築されているとみなされるべきである（35-36 頁）。

第 3 章（アッサム・ナショナリズムの文脈からみた反外国人運動）と第 4 章（選挙ボイコットとネリー事件）では、「ネリーの虐殺」の歴史的背景が明らかにされる。まず、1970 年代末以降の反外国人運動において、植民地期に英領インドの国内他地域（ベンガル地方）から移住したムスリム農民までもが、印パ分離独立後の「不法移民」とともに「外国人」とみなされるようになった。また、1983 年 1 月にインド政府がアッサム州議会選挙の実施を決めたことにより、選挙での勝利をめざす会議派勢力を支持するベンガル系ムスリムたちと、選挙をボイコットする反会議派勢力の支持母体であるアッサム人やティワの人びとなどとの間で集団間の亀裂が深まっていった。こうした状況を描写することで著者は、反外国人運動においてベンガル系

石坂晋哉「書評：Makiko Kimura *The Nellie Massacure of 1983*」
『三田社会学』第 19 号（2014 年 7 月）105-108 頁

ムスリムを「他者」化していった全アッサム学生連合（AASU）や、そしてなにより、不穏な状況下で十分に治安を確保できないにも関わらず選挙実施を強行したインド政府（会議派政権）に、「ネリーの虐殺」事件勃発の責任があることをはっきりと示している。

第 5 章（暴動参加者のエージェンシー――ネリー虐殺時の意思決定の分析）では、なぜ一般の人びとが暴動に参加したのかが明らかにされる。ネリー周辺地域では、植民地期に流入したムスリムたちが土地を得て農業の商業化にも適応してきたのと対照的に、ティワの人びとは土地を失い農業労働者に陥落したり他地域に移住したりするケースが多かった。しかしこの土地問題も、虐殺事件の遠因にすぎない。より重要なのは、ティワの人びとが、ムスリムを攻撃しなければ自分たちが襲撃されるという切羽詰まった危機感を抱いていた点である。虐殺事件直前には、少女誘拐や家畜の牛の失踪などがムスリムたちの仕業によるものだという噂や、すでにムスリムたちによる攻撃が始まったとする噂などが広まっており、懸念したティワの長老たちは会合をもち、そこで、ムスリムを攻撃するという決定がなされていたのであった。

第 6 章（虐殺の記憶）では、虐殺事件をめぐる 2001 年時点での人びとの語りが、いかに、各帰属集団が 2001 年当時に置かれていた状況に規定されたものだったかが示されている。ティワの人びとはアッサム人にそそのかされ攻撃にいたった点を強調したが、それは当時、自治をめざすティワ運動の高揚のなかで、アッサム人とは区別されるティワ・アイデンティティが追求されていたことと深く関わっていた。他方、ベンガル系ムスリムの人びとは、攻撃者を責めることはせず、事件を「われわれのうちの何人かが会議派に投票したことへの報復だった」と嘆いていたが、事件について声高に語りたがろうとはしないベンガル系ムスリムの姿勢は、当時のベンガル系ムスリムの政治的従属状況の反映だったのである。これと対照的なのが、第 7 章（結論）で描かれる 2007 年時点でのベンガル系ムスリムたちによる補償要求である。ベンガル系ムスリムが声を上げるようになったのは、2000 年代半ば以降、インド他地域の暴動被害者に補償が支払われるようになってきていたことや、アッサム州でのムスリム政治勢力が力をつけてきたことと深く関係している。人びとはこのように、状況の変化に応じて「事実」の解釈と語り方を変え続けてきたのである。

以上、本書の内容を概観した。本書が全体として取り組んだことのひとつは、この虐殺事件の責任追及であった。まず、現地の人びとは、一時的な異常な群集心理に突き動かされ盲目的に暴動に参加してしまったわけでも、政党等の組織下の操り人形として有無を言わさず暴動に参加させられたわけでもない。人びとは、自分たちが置かれた状況を踏まえ、自分たちの判断にもとづいて、それぞれ自分から暴動に参加していたのであった。他方、だからと言って、この虐殺事件の全責任を現地の人びとにのみ負わせるべきではない。事件が起こる状況をつくりあげたのは、ほかでもない、反外国人運動の指導者たちや、選挙を強行した政府だったのである。著者はこのように、全アッサム学生連合や会議派の責任をはっきりと指摘している。本書は、トップレベルの人びとの責任を強調しつつ、しかし一般の人びとを単に動員される対象としてしまわないように描く、という難しい課題に対し、ひとつの鮮やかな解答を示したといえ

よう。

本書のもうひとつの重要な特徴は、このように一方で事件の責任の所在を明確化しつつも、しかし他方で、決して事件の唯一の「真相」を解明しようとはしていない点である。著者は、現地の人びとの語りやさまざまな記録をたどるなかで、唯一の絶対の真実なるものが存在すると仮定しそれを明らかにすることをめざしたわけではない。そうではなく、本書ではむしろ、「事実」が常に複雑でダイナミックなものとして存在している点こそが強調されている。「事実」が、集団ごとに多様であり、また状況の変化に応じて変わっていくものだということが、本書では実証的に描かれている。またその際に、著者は常に、社会的経済的に従属的な位置に置かれた人びと（サバルタン）の声を拾い上げようと努力している。そうした姿勢の一環で、一部の先行研究が地元の支配的な立場の人びとの語りを鵜呑みにし、土地問題こそが虐殺事件の発生原因だとしてきたことに対し、痛烈に批判を行っているが（123-124 頁）、実に説得力のある批判である。

このように本書では、現地の複数の社会集団ごとに「事実」があるという描き方がなされている。「ネリーの虐殺」は、各集団が、それぞれの置かれた状況下で合理的に行動した結果、起こったのであった。つまり本書では、いわば、集団単位の合理的行動モデルが採用されているといってよいであろう。しかし、集団単位の合理的行動モデルは、わかりやすい反面、次のような弱点を抱えているように思われる。すなわち、集団間の境界を固定化するベクトルを有していること、そして、集団内部の差異を等閑視してしまいがちになることである。

著者が本書の結論で指摘しているとおり、現地でいま必要とされているのは、隣人集団間の対話と交渉を通じて和解を模索する努力である（150 頁）。南アジアの民族紛争や宗教紛争をめぐるこれまでの研究のなかでも、集団間の和解の重要性は強く意識されてきた。そのなかで、現地の人びとが集団の境界を越えて対話を図るためには、研究者の側も、民族や宗教・宗派等のアイデンティティやカテゴリーの過度の固定化につながりかねないような記述をできるだけ避けるとともに、人びとが実際に集団の境界を越えて（あるいは集団の論理に反して）動いているようなモーメントを発掘し、そこに積極的に光を当て、そこから問題解決の可能性を模索しようとする努力が重ねられてきた。例えば、暴動のなかで、危険を顧みずに敵方の隣人を匿ったり助けたりしたエピソードをとりあげ、そうした行動が可能になる条件とはいかなるものか等についての考察が深められてきた（Nandy 2003；足立 2010）。本書でも、たとえ集団単位の合理的行動モデルを基本にするとしても、もう少し、集団内の個別の人たちによる、各集団の決定からはみ出るような、あるいは各集団の決定に反するような動きを描くことによって、より複雑な実態を示唆することはできなかっただろうか。集団単位の「エージェンシー」だけではなく、集団内のひとりひとりの、よりミクロなレベルの「エージェンシー」を、もう少し描くことはできなかっただろうか。

ともあれ、インドのなかでもとりわけ入境困難な地域に足を運んで現地フィールドワークを行い、虐殺事件という重いテーマに向き合い、おそれることなく事件の責任を追及し

た著者の姿勢は、驚嘆に値する。また、インド現代史を語る際に避けて通るべきではないこの「ネリーの虐殺」事件についてのモノグラフが、インドの現地の人びとを含む幅広い読者層に向けて、英語で刊行されたことは、非常に意義深いといえよう。

【参考文献】

足立明. 2010. 「民族紛争」田中雅一・田辺明生編『南アジア社会を学ぶ人のために』世界思想社: 208-217.

Nandy, Ashis,. 2003. “The Twilight of Certitudes: Secularism, Hindu Nationalism and Other Masks of Dec -ulturation.” pp. 61-82. in *The Romance of the State and the Fate of Dissent in the Tropics*. New Delhi: Oxford University Press.

（いしざか　しんや　京都大学）